

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

次の文章は、『女坂』の最後の部分である。この小説は、明治期のある家族の歴史を、白川倫の生き方を中心に描いたもので、文章中の須賀は、行友の妾（妻を持つ男が継続的に経済的援助を与え、面倒をみている愛人）として白川の家に長年同居している。

他愛のなくなった病人を行友はそれこそ生涯愛し通した妻のように大切に扱った。①老主人の意志が法令のよいうな一家親類のものをはじめて倫を正夫人らしく大切に看護した。

臨終も間近く迫った二月の末の夜であった。その夜は道雅の妻の藤江と行友の姪の豊子が夜伽ぎに来て看護婦も休ませ、二人だけ病室にいた。火鉢の火がついたかと思う間もなく尉になってしまふ、しんしんと底冷えする夜であった。

「豊子さん」

今までうつらうつら眠っているようだった倫が大きく眼をひらいて枕の上の顔をこっちへふり向けて呼んだ。豊子が返事をしながらにじり寄ると、藤江はあわてて 姑 の頭をおさえた。余り急な強い動かし方で吐き気のあるのを怖れたのだったが、倫はうるさそうに頭を振って藤江の支えている手を払いのけた。感情を露骨に出したことのほとんどない倫のそういうあらくれた動作に二人はぎよっとして、倫のこめかみのげっそり落ちた白髪まじりのそそけた鬢のあたりを気味悪くみつめた。倫は頭こそ上げなかったが半身をもち上げるほどの力の籠った声で一気に言った。

「豊子さん、おじさま（行友のこと）のところへ行つてそう申し上げて下さいな。私が死んでも決してお葬式なんぞ出して下さいませぬ。死骸を品川の沖へ持つて行つて、海へさんぶり捨てて下されば沢山でございまして……」

②倫の眼は昂奮に輝いて生々していた。それは日ごろの重くたれた眼瞼の下に灰色っぽく静まっている眼ざしとは似ても似つかぬ強さにあからさまな感情を湛えていた。

「まあ、おばさまとんでもないことですね」

「どうしてそんなこと仰いますの？」

豊子と藤江は必死な声でいったが、夢の中にいるような倫の耳には入らなかった。

「さ、すぐ行つて来て下さい。そうでないと間に合わないんですから……ほんとうにそういうんですよ。海

へ私の身体を、さんぶり捨てて下さい……さんぶりと……」

「③さんぶり」という言葉を調子づいてほとんど快げに言った。

病人にせき立てられて藤江と豊子はともかく廊下へ出た。向きあつて見合わせた互いの眼の中で、二人の女は夫を持ってそれぞれ苦勞して来た女だけの複雑な解り方うなずきあつていた。

「どうしたものでしょう。申し上げますか」

「申し上げましょう。あんなに言つてもらいたがついていらつしやるんですもの……」

二人は倫の耐えて来たすべての感情の鬱積を自分たちだけの胸に蔵つて置くのが空おそろしかった。

「お父さま、まだお寝みじやいらつしやいませんか」

藤江がその声をかけて豊子があとから、行友の居間に入つて行つた。行友はいつもの通り、坐椅子に凭つて硼酸水で眼を洗っていた。須賀も孫たちも傍にいなかった。行友は嫁と姪の看護ぶりを犒うように、角のある光の強い瞳を霞ませて、

「御苦勞だね」

といった。

豊子は坐るとすぐ口早に倫の言葉を取り次いだ。④病人のうわ言として話すつもりだったのが、言葉に出すと、倫がのり憑つているように真剣に上ずつた声になった。

行友の眼を蔽っていた霞みが一瞬に晴れた。老人は少し口を開きかけたまま放心した顔になった。洗つたばかりの湿った瞳には幽霊を見出したような恐怖の影が動いた。と思うと普段の顔に戻ろうとして、不自然な筋肉の動きが彼の端正な顔を醜くゆがめた。

「⑤そんな莫迦な真似はさせない。この邸から立派に葬式を出す。そう言つてくれ」

叱るしかように早口にいい終ると、行友は横を向いて強く鼻をかんだ。四十年来、抑えに抑えて来た妻の本念の叫びを行友は身体一ぱいの力で受けた。それは傲岸ごうな彼の自我にひび裂れる強い響を与えた。

(注)

夜伽よがぎぎ夜、寝ないで付き添うこと。

尉ゑい火のついた炭がとぼって白い灰になってしまったもの。

本念ほんねん＝本念の思い。

傲岸ごう＝いばり返って相手をばかにするさま。

問一 傍線部③について、

① 「老主人」とは誰のことか。文章中の人名で答えなさい。

② 文章中の、倫・道雅・藤江・豊子は、それぞれ「老主人」とどのような関係にあるか。

解答欄の形式に従って答えなさい。

問二 傍線部⑥「倫の眼は昂奮に輝いて生々していた」のはなぜか。次から最も適当なものを選び記号で答えなさい。

ア 感情を露骨に出してしまったから。

イ 長年の憤懣の情を初めて夫にぶつけることができたから。

ウ 久しぶりで病状が好転し気力が戻ったから。

エ 自分の死後のことであろうやく決心ができたから。

問三 傍線部④「さんぶり」という言葉には倫のどんな気持ちを感じられるか。次から選び記号で答えなさい。

ア すべてをさっぱりとあきらめたい。

イ 老主人に心を入れかえてほしい。

ウ このような生活は断ち切りたい。

エ 言葉の響きが快い。

問四 傍線部⑤について、

① 豊子が最初、「病人のうわ言として話すつもりだった」のはなぜか。二十字以内で答えなさい。

② 豊子はなぜ「真剣に上ずった声になった」のか。豊子の気持ちを考えて、簡潔に答えなさい。

問五 傍線部⑥について、

① 倫が「そんな莫迦な真似」をしてくれるように言ったのはなぜか。文章中の語句を用いて、三十字以内で答えなさい。

② 行友が「この邸から立派に葬式を出す。そう言ってくれ」と言った主たる理由は次のうちどれか記号で答えなさい。

ア 病人への励まし

イ 倫への深い愛情

ウ 世間に対する体面

エ 自分に逆う者への反発

ア 病人への励まし

イ 倫への深い愛情

ウ 世間に対する体面

エ 自分に逆う者への反発

二 次の傍線部のカタカナを漢字に漢字をひらがなに直しなさい。

① 販売をソクシンする

② シモン会議を開く

③ 船がサンバシに着く

④ ヒレツな手段

⑤ コダイな表現

⑥ キロに立つ

⑦ 地盤がリュウキする

⑧ 容姿タンレイな人

⑨ 行政のタイマン

⑩ 頼みをショウダクする

⑪ 理論をリセンする

⑫ 和歌をロウエイする

⑬ 晩酌を楽しむ

⑭ 物資を通送する

⑮ 経費が漸増する

⑯ 大臣を更迭する

⑰ 砂上の楼閣